

図書館だより



平成30年4月9日発行

今年の春は早々に桜が開花し、3月の内に関東でも満開となりましたね。いつもより早いお花見を楽しむことはできたでしょうか。

さて、今日から新学期が始まりました。1年生のみなさん、ご入学おめでとうございます。勉強も部活動も行事も全力で取り組み、充実した秋草での三年間を送ってください。1年生だけでなく、2、3年生も新生活に慣れるまでは疲れが溜まりやすいですから、自分の身体を気にかけて、合間合間に休息を入れて過ごしましょう。「何かホッとする本が読みたいな」と思った時には、いつでも図書館の司書に声をかけてください。小説、写真集、画集、絵本、など様々なジャンルから、「今のあなたにはこれがぴったり!」という本を紹介します。また「ノートの上手な書き方や自分に適した勉強法を探したい」、「進路を考えるのに役立つ本を知りたい」、「部活動で技術の向上がしたい」など勉強や部活動に意欲を燃やす人にぜひ読んでほしい本もたくさん揃っています。図書館の蔵書を余すところなく活用してください。



翠川先生は今日も全力

913.6-7 『グリーングリーン』 あさの あつこ || 著 徳間書店

失恋した直後に喫茶店のマスターがごちそうしてくれたご飯。そのおいしさは、翠川真緑に力を与えてくれた。ご飯に使われていたお米の産地は兎鍋村。真緑の暮らす都会とはまったく違った風景の広がる田舎だ。1杯のご飯に心を動かされた真緑は、その兎鍋村に住居を借り、隣町にある農林高校で教師に就くという本人も想像しなかった道を選び、新生活をスタートさせる。しかし、真面目ではあるけれど、どこか頼りのない真緑の教員生活は落ち込むことの連続。それでも、真摯に生徒と向き合い、豚と会話ができるという意外な才能も開花させ、少しずつ前進していく。

疲れた心を空で癒す

451-9-2 『すごい空の見つけかた2』 武田 康男 || 写真・文 草思社

私たちの上には、365日いつでも空が広がっています。当たり前の光景すぎて、空をじっくり見上げるとことを忘れたまま過ごしている気がします。それがどんなにもったいないことか、この本を読むと、しみじみ感じます。時間によって、天候によって、空は変化します。青い空が橙色やピンク色に染まったり、驚くような雲や綺麗な虹を出現させたり、そんな瞬間に出会えると、「今日はいいい日だな」と心が浮き立ちます。そのような現象がどうして起こるのかという解説つきの、たくさんの“すごい空”にこの本を開いて出会ってみませんか。

図書館の開館と貸出について

利用案内を行うのはこれからですが、1年生のみなさんも今日からさっそく本を借りることができます。ここで、2、3年生を含め生徒のみなさんに向け、図書館の開館時間や貸出についてお知らせします。

| | | |
|------|------------------------------------|----------------------------|
| 開館日 | 月曜～土曜 | ※ 日・祝日は休館です。 |
| 開館時間 | 通常 | 8:50～19:00 (※月曜は11:00より開館) |
| | 土曜 | 8:50～17:00 |
| | 考査1週間前 | 8:50～17:15 |
| | 考査中 | 8:50～17:00 |
| | ※学校行事及び長期休暇中の開館に関しては、その都度、お知らせします。 | |
| 貸出冊数 | 3冊まで | |
| 貸出期間 | 新着本*1週間 その他*2週間 (雑誌も最新号以外は貸出可です) | |

- ★みなさんの持っている生徒証が図書館の利用証となります。この生徒証があると貸出がスムーズに行えますので、用意をお願いします。
- ★本の返却には記念館前にある返却ポストを利用することができます。



図書委員によるおはなし会や読書会、映写会を定期的に行っている他、館内で楽しめる制作コーナーの設置も季節ごとに行なっています。図書館での楽しみは読書だけではありません。気軽に図書館へ足を運んでください。

図書館司書の「今月はこの本を読みました」

書名に惹かれて今月は『たぶん、出会わなければよかった嘘つきな君に』(B913.6-サ 佐藤青南 || 著 祥伝社)を読みました。この本のおもしろいところは、書店員さんの「今、一番読者に読ませたい!」というアイデアを著者の佐藤さんが膨らませて小説にしたものだというところです。本を売るプロである書店員さんなら、読者の気持ちもよくわかっているはずだから、おもしろいに違いないと期待して本を開きました。

彼女なんていないと思っていた僕に、突然舞い込んできたナナとの出会い。お互いに惹かれ合っている様子から、「これは上手いくのかな」と思っていたら、そうはいかないのですね。ふたりの恋を邪魔するかのよう、僕に想いを寄せるもう一人の女性が登場し、物語をかき回していきます。そして、とんでもない殺人事件が起きてしまうのです。名乗りでた犯人は、真犯人なのか…と、何重にも張られている伏線から物語の行方を予想する楽しさと、終始襲ってくるヒヤヒヤ感が癖になる恋愛ミステリーでした。

そうだ、先生と本のことを熱く語ろう!! ~鈴木信晃先生編~

司書(以下 司):こんにちは。いつも図書館だよりにご協力いただき。ありがとうございます。

さっそくですが、私は『人生を3つの単語で表すとしたら』って本を読んでから「自分を3冊の本で表すとしたら、どの本を選ぶだろうって考えるんですけど、鈴木先生の自分を表す3冊の本を教えてくださいませんか。

鈴木先生(以下 鈴):まずは『手紙屋』ですかね。

913.6-キ『手紙屋 蛍雪篇』 喜多川 泰 || 著
ディスカヴァー・トゥエンティワン

司:ああ! 去年、図書館だよりでもおすすめして

くれた受験生が主人公の本ですね。鈴木先生自身はあの本を何歳の頃に読んだんですか。

鈴:おととしくらいでしょうかね。

たまたま目にして読んでみて、ちょうどクラスの子に紹介するのにぴったりの題材だなと思ったのを覚えています。もっと早くこの本に出会っていたら、どうなっていたかなと想像するとおもしろいですよね。

司:それ、わかります。読む歳で感じ方が変わりますよね。

鈴:僕もそう思います。学生の時に読んだ本を読み返すことがあって、当時読んでいた時の気持ちと違う感じができていいと思います。生徒のみなさんにもおすすめしたい読み方です。

特に『桐島、部活やめるってよ』は何回も読みましたね。

司:ああ、あれは私も衝撃でした。大人になってから読んだんですけど、高校生の時に読んでいたら、この本に救われる

913.6-ア『桐島、部活やめるってよ』
朝井 リョウ || 著 集英社

ことってあったらなって思いました。鈴木先生は大人になって読み返した時、どう印象が変わりましたか。

鈴:高校生の時は、仲間が部活を辞めたら自分はどうするだろうと考えて読んでいたけど、大人になってからは教職に就いたので、「こういう生徒がいたらどう対応したらいいだろう」と思いながら読むようになりました。

司:朝井リョウさんの作品は他に何を読まれていますか。

鈴:『時をかけるゆとり』で心を掴まれたんですよ。「わかるわかる」って。そこから『何者』にいきましたね。

就活の頃を思い出しながら読んだんですけど、逆にこれは就活の時に読まなくてよかったなと思いました。

913.6-ア『何者』 朝井 リョウ || 著 集英社

自分の弱いところを周りに責められているシーンがあるんですけど、そこで「これ言われたら嫌だな」と思う反面、そう言う方の気持ちもわかるし、その両方を上手に掴んでいるなど。その言葉にできないような心情を上手く書いているところが「朝井リョウすごい」と思いましたね。

司:私は『星やどりの声』が好きです。朝井リョウさん、読みやすいし、上手ですよ

鈴:はい、気づいたら読み終わっているって感じですね。

司:『手紙屋』、『桐島、部活やめるってよ』ときて、じゃあ最後、3冊目にはどんな本が出てきますか。

鈴:…(しばし悩む)『八日目の蝉』が印象に残ってますかね。

深く読み込むってことをしたのは、この本が初めてなんですよ。

913.6-カ『八日目の蝉』
角田 光代 || 著 中央公論新社

司:偽りの母子の逃亡生活から親子ってなんだろうと考えさせられ

る本ですが、先生は母と子、どっちの気持ちに寄り添って読みましたか。

鈴:僕、母ですね。子ども気持ちでは読めなかったかな、その時は…。

司:これも読んだのは大学生の時ですか

鈴:はい。女性じゃないとわからない気持ちってあると思うんですが、それでも、なんかわかるなって思ったんですよ。その子にとって何が幸せなのか。いけないことをしていても幸せだったらいいのかっていう。

道徳観ってのを改めて考えさせられる本ですね。

司:そうですね。いけないことですが、あのまま逃げられたら幸せだったのかなと考えてしまいました。

鈴:引き離されるシーンの「ママ」って呼ぶところがもう…。

司:でも、本当のお母さんの気持ちに立てば、またそれもわかるし、苦しいですよ。

鈴:結果的には誘拐なので、駄目なんですけど、子を持つ親がどうあるべきか、ってのを考えるきっかけには、なるんですかね。

司:三冊目で女性作家が出てきましたが、普段、男性作家と女性作家どちらの作品を読むことが多いですか。

鈴:特に決めていないんですけど、作者は結果論ですね。おもしろそうと手に取ったら、男性作家な時もあるし、女性作家な時もあるし。でも、男性作家も女性的な要素を兼ね備えた人が多いですかね。そう考えると、僕自身も女性寄りの思考なんですかね、どちらかというと。

司:それは昔から?

鈴:いや、今、気がつきました(笑)

司:(笑)

そんな鈴木先生、今気になっている本は何でしょう。

鈴:『島はぼくらと』ですかね

913.6-ツ『島はぼくらと』 辻村 深月 || 著 講談社

司:辻村深月ですね。

この人も10代の女の子の気持ちを上手に物語に組み込んでいる作家さんだなと思っていますが、辻村さんの本は今までも読んできているのですか。

鈴:いや読んでいないですね。

司:じゃあ『島はぼくらと』が初めてとなるのですね。気になったきっかけは何でしょう。

鈴:帯です。

司:帯!

鈴:楽しそうだなって。学園もの、高校生もの、好きなんです。自分があんまり高校の時、友だちと遊んだりってできてなかったから、本を読んで、その青春時代を本の中で楽しんでいるって感じですね。

だから色々な青春を楽しんでいます。

司:それって本の持つ魅力ですよ。

鈴:国語の先生になった今、読書が趣味ではなく生活の一部になったので、中身が楽しいものを読んでいます。もちろん、純粋に本を読んで楽しみたいという気持ちはずっと持っていますけどね。

司:うんうん。その気持ちでこれからもたくさん図書館だよりにおすすめの本を紹介してください。

鈴:はい! 今後ともお世話になります!

司:ありがとうございました!!